

関西学院とヴォーリス

田淵 結

はじめに

関西学院にとってW・M・ヴォーリスの存在は、非常に大きなものがある。例えば二〇一四年の関西学院創立一二五周年記念式典の広報ポスターの共通デザインが、上ヶ原キャンパス中央芝生から時計台であり、また式典当日プログラムには時計台カノピーのスケッチがあしらわれている。関西学院上ヶ原キャンパスは、学院が創立四〇周年にあたる一九二九年、それまで現在の神戸王子公園（当時の原田村）にあった校地を、大学開設を目指して移転した、ブランドニューキャンパスであり、その全体設計者はヴォーリス率いるヴォーリス建築事務所であった。しかし創立一二五周年記念という広告として、そのデザインが適切であるのかどうか、つまりそこには創立者ランバスの肖像もなく創立時原田校地を示す写真など、学院開設を想起させるような内容は全く用いられることはなかったのである。^①しかしながら、結局学内からそのことについての異論などはほとんどなかった。つまりそれほどまでにこのヴォーリスデザインによるキャンパスは、

関西学院の存在そのものを代表するものとなっていることであつた。「創立者ランパスはどこに？」という違和感を抱かされた筆者は、学内的には少数派なのであろうか。

関西学院とヴォーリズとの関わり、特に関西学院のキャンパス設計を委ねられるという深い関わりについては、何よりも第四代院長ベーツとヴォーリズとの個人的な親交、友情があつたことから説明されることが多い。さらにその二人の出会いについて、伝説として捉えたいという人々の思いが、ある意味期待をこめて示されている。それはヴォーリズが海外での伝道活動への決意を与えられた一九〇二年、カナダトロントで開催されたトロントでの第四回学生伝道奉仕団大会に出席した際に、そこに後に関西学院第四代院長、さらに初代学長となるベーツも参加してゐたのである。ベーツもまたこの大会においてアジア伝道への決意を固めたこともあつたので、その大会での出会いが「期待を込めて」語られることが多く、筆者もその一人であつた。しかし、そのことを証言する両者の記録はないし、ほとんど歴史的事実として確認することはできないであろう。そこで本論では、改めてヴォーリズの存在が関西学院の発展の方向性をいかに決定していったかを検証しつつ、関西学院に対してヴォーリズの持つ意義を確認してみたい。

一、

まずヴォーリズが関西学院のキャンパス形成にかかわつた歴史的な経過を確認すると、彼の関西学院キャンパス設計者としての最初のかかわりは、一九一二年の神戸原田校地における神学館建設が最初となる。以下、一九二九年の移転の直前まで彼は関西学院の校舎建築を全面的に委ね

られることになる。その全貌は関西学院史紀要に発表された山形政昭氏の『関西学院キャンパスの建築』で詳細に紹介されている。^③以下それに基づき、彼の関西学院における建築活動を表で示す。

原田キャンパスの主要建築^④

建築名称	竣工年月日	設計者
神学館	一九二二年四月	ヴォーリス合名会社
成全寮	一九二二年一〇月	ヴォーリス合名会社
普通学部校舎	一九二三年二月	ヴォーリス合名会社
マシユーズ邸（宣教師館）	（一九二二年四月設計）	ヴォーリス合名会社
ベーツ邸（宣教師館）	（一九二二年四月設計）	ヴォーリス合名会社
西住宅	（一九二二年七月）	ヴォーリス合名会社
洋人小学校 ^⑤	一九二三年九月	ヴォーリス合名会社
ウツズウォース邸（宣教師館）	（一九一四年一月設計）	ヴォーリス合名会社
クラッグ邸（宣教師館）	（一九一四年一月設計）	ヴォーリス合名会社
啓明寮	一九二六年五月	ヴォーリス合名会社

中学部校舎（再建）	一九一九年三月	ヴォーリス合名会社
ハミル館	一九一八年十二月	ヴォーリス合名会社
自修寮	一九一九年九月	ヴォーリス合名会社
中央講堂	一九二二年四月	ヴォーリス建築事務所
文学部校舎	一九二二年四月	ヴォーリス建築事務所
第二啓明寮	一九二三年三月	ヴォーリス建築事務所
高等商業学部校舎	一九二三年三月	ヴォーリス建築事務所

さらに西宮上ヶ原における建築活動としては、
上ヶ原キャンパスの主要建築（*印は全体または一部現存、【】内は現在の呼称）⁽⁶⁾

*総務館【学院本部】	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
中央講堂	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
*高等商業学部校舎【経済学部】	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
*高等商業学部別館【商学部】	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
*図書館【時計台】	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所

日本人住宅（六棟）	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
*宣教師館（一〇棟）【外国人住宅】	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
中学部寄宿舎	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
寄宿舎付属食堂	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
啓明寮	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
静修寮	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
成全寮	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
中学部校舎	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
門衛舎	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
消費組合	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
学生会館	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
宗教館	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
教授研究館	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
*神学部校舎【神学部】	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所
*法文学部校舎【文学部】	一九二九年三月	ヴォーリス建築事務所

*ハミル館	一九二九年三月(原田より移築)	ヴォーリス建築事務所
*旧正門【大学院1号館前門柱】	一九二九年三月(原田より移築)	ヴォーリス建築事務所
*正門	一九三〇年三月	ヴォーリス建築事務所
*子科校舎【高中部本部棟】	一九三三年三月	ヴォーリス建築事務所
短期大学校舎	一九五三年一月	ヴォーリス建築事務所
商経合併教室	一九五二年五月	ヴォーリス建築事務所
文学部合併教室	一九五三年五月	ヴォーリス建築事務所
法学部合併教室	一九五五年一月	ヴォーリス建築事務所
三日月食堂	一九五四年九月	ヴォーリス建築事務所
新月クラブ	一九五四年一〇月	ヴォーリス建築事務所
法学部校舎	一九五七年九月	ヴォーリス建築事務所
*経商教授研究館【第二教授研究館】	一九五八年五月	ヴォーリス建築事務所
*体育館	一九五九年一月	ヴォーリス建築事務所
*学生会館【学生会館旧館】	一九五九年一月	ヴォーリス建築事務所
*ランバス記念礼拝堂	一九五九年一月	ヴォーリス建築事務所

上ヶ原キャンパスについては、一九二九年のキャンパス開設にあたって全体設計（レイアウト）そのものをヴォーリズ建築事務所が担当しており、まさに新たな学院のイメージ、さらにアイデンティティとも呼びうる学院の性格がこのキャンパスによって形作られた。創立一二五周年記念事業のポスターイメージにその点が反映されることになったことは十分に考えられる。このような関西学院キャンパス展開において次の事が注目される。まず、一九二二年の神学館は、彼が日本における本格的な建築活動を開始するためにヴォーリズ合名会社を設立した最初期の本格的な作品である。そして、一九五九年の上ヶ原キャンパスランバス記念礼拝堂献堂の時、彼はすでに病床にあつて具体的な設計建築活動に従事しえなかつたのではあるが、彼の最晩年におけるヴォーリズ建築事務所作品の一つということが出来る。つまりヴォーリズの本格的な建築活動の最初と最後より大きく括れば、彼の生涯にわたつて彼は関西学院とともに活動をした、とさえ思われる。⁽¹⁾

二、

そこでヴォーリズのかかわりがなぜ一九二二年の神学館からであるのか、ということが問題となるが、実はこの神学館は関西学院にとつても、ヴォーリズにとつても、両者のそれまでの歩みの中で新たな出発を画する大きな意味をもっていることであり、そのことのゆえにヴォーリズが以後その晩年まで関西学院校舎の建築を文字通り一手に引き受け続けたことの意味も、そこに由来するものであつたと考えられる。

一八八九年に創立された学院は、もちろんその設立届を兵庫県知事に提出しており（その提出

日であった同年九月二八日が現在も創立記念日とされてきている)、一般に生徒募集を行う意味では社会的存在ではあったものの、まさに私塾であった。特にその性格を浮き彫りにさせたものが、学院創立一〇周年となる一八九九(明治三三)年に出された「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件(明治三十二年八月三日文部省訓令十二号)」の発令であった。その内容は、「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」というもので、実質的に文部省認定学校における一切の宗教(キリスト教を含む)教育を禁じるものであった。キリスト教の主義に基づく教育を目指す関西学院としては、キリスト教主義を捨てて認定学校となるべきか、認定学校を得ずに私塾としての立場にとどまりキリスト教主義教育を徹底すべきか、という選択を迫られることになった。ただし文部省認定学校ではない教育機関に対しては、上級学校進学資格、徴兵猶予などの特権は認められなかったために、私塾の状態であった学院は生徒確保が徐々に困難となり、経営危機に直面しつつあった。⁽¹⁰⁾ そのような状況のなかで学院は結局文部省認定獲得方針を決定し、認定学校として求められる条件整備を進めてゆく。一九〇八年には専門学校令によって関西学院神学部を専門学校として認可を得ることになり、⁽¹¹⁾ 同時にその動きのなかで学院経営にカナダメソジスト教会が参画することとなり、一九一〇(明治四三)年にベーツを代表とするカナダ人宣教師団が着任する。⁽¹²⁾ その校舎として一九一三年の神学館が準備されることになった。非常に興味深いことであるが、「宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式」を禁止する訓令指示のもとで、学院が文部省認定学校となるための最初が神学部であったという現実、一八九九年訓令実施から二〇年の間にその適応状況が大き

く変化したことをうかがわせるものであるが、そのことについての考察は後日の課題としたい。その後カナダメソジスト教会の経営方針が、積極的に認定学校としての一層の充実を図るものであったことは、上記建築年表を通じても読み取れるところである。⁽¹²⁾一九一二年には高等学校令により高等学部（文科・商科）を開設し、それがやがて高等学部文学部、高等商業学部としての展開を示すことになる。とくに高等商業学部の発展はめざましく、安定した学生確保が可能となった。⁽¹³⁾そこで学院規模の拡大のなかでキャンパス・校舎整備が求められ、一連のヴォーリズ建築作品を出現させることになるが、一九二九年までに原田校地は文字通りヴォーリズキャンパスとしての様相を呈していた。一九二九年の上ヶ原へのキャンパス移転は、さらに大学開設（昇格）を目指すものであり、⁽¹⁴⁾いかに文部省認定学校としてのあり方が学院の発展に大きな意味をもっていたかが理解される。

三、

ところで関西学院経営にカナダメソジスト教会が参画することとなりベーツが着任した一九一〇年は、ヴォーリズの日本における活動にとっても画期的な年であった。彼は一九〇五年、YMCAのあっせんにより滋賀県立商業高等学校英語教師として近江八幡に着任した。⁽¹⁵⁾ただし彼の本来の来日の動機には、広い意味でのキリスト教伝道への志が込められていた。しかしながら、彼はランバスやベーツのようなキリスト教派教会が組織するミッションボード派遣の宣教師という形はとらず、自給自立の形でのキリスト教活動を目指していた。⁽¹⁶⁾彼のような信徒伝道者的活

動の背景として、当時のアメリカで展開していたエヴァンジェリカル（福音主義的）キリスト教伝道活動の展開があったことが近年指摘されている。その特徴として「教派ごとの教理や聖職者の行う儀式を中心としたものではなく、信徒各人が直接に経験できる回心と新生を中心とした実践的な性格」⁽¹⁷⁾「素朴な聖書主義、楽観的な共同体思考、保守的な道德観」⁽¹⁸⁾などが挙げられているが、特に興味深いのはその運動指導者における回心（リバイバル）体験である。実はヴォーリズが海外伝道を決意するきっかけとなったのが一九〇二年トロントで開催された第四回学生海外伝道学生奉仕団大会の際、中国に伝道している婦人宣教師メイラーによる講演中の彼自身の回心体験であった⁽¹⁹⁾。そのような経緯の中で信徒伝道者的な立場で来日し、滋賀県立商業英語教師としての働きを開始したが、彼は同時に生徒たちに自宅を開放してバイブルクラスを行い、その活動が徐々に八幡YMCAとして組織化されていった⁽²⁰⁾。このことは、近江八幡という、キリスト教に対して否定的な環境からの批判、反発を招くこととなり、結局彼は着任二年目の一九〇七年に英語教師を辞任することとなった。この英語教師辞任は、彼の自立・自給活動の根柢を失わせるものとなった意味では一つの挫折であるが、しかし彼の本来の来日目的を明確化するという意味をも持っていた⁽²¹⁾。

その後彼は彼の盟友ともいえる京都YMCA主事のジョージ・フェルプスの協力を得てYMCAを背景とした活動を続けるが、そのなかでヴォーリズがコロラド大学在学時代に個人的に建築家としての興味を有していたこと⁽²²⁾もあり、京都YMCA本館建築工事に際して、その現場における監督業務をゆだねられている⁽²³⁾。その後彼はいったん帰国し、一九一〇年に建築家のチェーピンなどを伴って再来日し、ヴォーリズ合名会社を設立し、本格的なビジネスとしてのヴォーリズ

合名会社を設立、建築を主とする活動を開始する⁽²⁵⁾。そこで関西学院神学館であるが、その設計は一九一一年六月に行われていることを考えると、その設計依頼はそれ以前に行われたものであり、彼の合名会社の初期の作品、つまりヴォーリスの本格的建築活動のスタートを画する作品として位置づけられる。

四、

さてこのヴォーリスと関西学院との接点であるが、その関係は徐々に醸成されていったものと思われる。というのも、彼は来日直後の一九〇五年に神戸の関西学院を訪れているが、それはキリスト教青年会（YMCA）関係の訪問であった⁽²⁷⁾。ただしそこで学院との直接的なつながりを生み出すものではなかったものの、学院の存在が彼の中に意識されるものであった。彼が特に校舎建築の関係で関西学院とのつながりを持つのは、ヴォーリス合名会社を設立させる前後に、京都YMCA本館建築工事にかかわったのち、京滋地区YMCA会館の建設⁽²⁸⁾、そして神戸YMCA会館の建築に関係したことが大きい⁽²⁹⁾。すでに関西学院には学院創立直後より基督教青年会活動が盛んであり、そのなかで宮田守衛などは神戸YMCAでの働きにも深く関係する⁽³¹⁾。関西学院は、文部省認定学校としての学校整備に着手しようとしていたので、ヴォーリスのようなキリスト教への深い理解を持ちつつ建築活動を展開するような人物は、学院にも好ましいものであった。そこでベーツと出会い、特に両者がトロントの学生伝道奉仕団大会での体験を共有していることなど、共感するものを発見しあうことによって、その二人の間に、また関西学院との関係に共鳴しあう

ものが生まれたことが考えられる。⁽³²⁾ さらに想像をたくましくして言えば、新たな認定学校としての歩みに着手しようとする学院およびベーツたちと、ヴォーリズ合名会社設立によって本格的に自立・自給の伝道活動を開始しようとしたヴォーリズ、この二人の歩みから、「幻し」(ビジョン)をとともに抱きあう同志的なつながりが生まれたのである。⁽³³⁾ つまり関西学院はヴォーリズの単なるクライアントではなく、ともに日本におけるミッシヨンⅡ伝道活動の具体的な展開のためのフィールドであり、そこに二人は自らの宣教活動が具体的な形として実現する意味をもち、「神学館」建設はまさにその第一歩としての意味を持っていたのである。

さらに一九二九年の上ヶ原キャンパス建設のトータルデザインにおいて、当時の関西学院のリーダー、ベーツとヴォーリズとの新しい学院形成のビジョンがより明確に打ち出されている。ヴォーリズは関西学院においては個別の建物の建築よりも、キャンパス全体の統一感によるイメージを重視している。ただし原田校地においては、ヴォーリズ参画の時点ですでに何棟かの建築物が存在していた。そのなかで彼は、イギリス人ウイグノールの設計により一九〇四年に完成されたブランチメモリアルチャペルを持つ、煉瓦造りスタイルを神学館から高等商業学部の校舎まで援用している。⁽³³⁾ しかし上ヶ原の場合はまったく白紙からの設計であるので、その意味で依頼者である関西学院、とくにベーツと設計者ヴォーリズとの、まったく新しい学校ビジョンの提案が求められていた。とくに上ヶ原移転は、関西学院が新たに大学開設を目指すものであり、関西学院の新しい歴史を上ヶ原に開くという画期的な意味をもっていた。そこで採用されたのが、建物デザインとしてはスパニッシュ・ミッシヨン・スタイルであった。そのデザインについての詳細は、先に引用した山形論文に紹介されているが、そこで用いられるキーワードは、「(アメリカ)

カリフォルニアの伝道精神「精神な自由さ」と評され、まさにアメリカ社会におけるカリフォルニアのフロンティア的感覚のなかに、関西学院が新たな知のフロンティアとして大きな可能性をこれから発揮することを期待させるデザインが採用されている。⁽³⁴⁾ さらにキリスト教主義学校を持つキャンパスとして、その全体レイアウトを通じて、聖書的主張がそこに込められていることも重要である。正門から中央芝生、甲山頂点へと貫かれる直線がキャンパス東西の軸線として引かれ、⁽³⁵⁾ そこで正門にたたずむとき、あるいは現在「学園花通り」と名付けられた正門に至る道をすすむとき、旧約の詩人が「私は山に向かって目を上げる」(詩篇一二一篇一節、日本聖書協会口語訳)とうたうその情景を想起させ、このキャンパスが「天と地を造られた主」の守りのなかにあることを実感させるものとなる。さらに正門を入れて中央芝生に佇むとき、詩篇二三篇「主は私を緑の牧場にふさせ」(詩篇二三篇二節)に続くメッセージを彷彿とさせる。⁽³⁶⁾ また上ヶ原台地に造られたキャンパスは「山の上にある町は隠れることができないうえに「あなたがたの光を人々の前に輝かす」べきことが訴えられる(新約マタイによる福音書 五章一四、一六節)。つまり上ヶ原キャンパスは、「その声も聞こえないのに」聖書の言葉を人々に語りかけ続けるものとなっており(詩篇一九編)、まさに関西学院の目指すキリスト教主義のあり方を具現するデザインとして構成されている。⁽³⁷⁾

むすびにかえて

さらに付言すれば、上ヶ原キャンパスのこの軸線を挟んで、右に人文・思想・理念系学部建物

(神学部、文学部)、左に社会科学・現実系学部建物(商学部、経済学部)を配置し、関西学院大学の学びがその両面のバランスのなかで展開されることを示し、その中央にスクールモットー「Mastery for Service」のエンブレムを掲げる図書館が知の集積の場として配置されるなかに、関西学院大学が総合大学としての歩みを続けようとする姿勢を明確に打ち出している。⁽³⁸⁾ そのキャンパス完成後、新たに作られた校歌『空の翼』は、第一節で「清明ここに道ありわが丘」とキャンパスへの歩みをうたい、第二節は「眉にかざす清き甲山」と正門からの風景を、さらに第三節で「旗は勇む武庫の平野」と、時計台二階からの展望をうたいあげるのも、この新しいキャンパスへのアプローチ、その場での学究生活を経て、広く社会に羽ばたちゆく関西学院大学学生のあり方を示し、まさに「上ヶ原ふるえ」という関西学院のひとつの原風景をいつまでも心の中に描き出すものとなっている。これほどまでにヴォーリスデザインのカンパスは、関西学院の建学の理念、固有性、アイデンティティを十二分に示すものとなっており、創立一二五周年が、創立時への回顧としての記念ではなく、一二五周年にわたって形成されてきた関西学院スピリットの再確認の祝典という意味においては、上ヶ原キャンパス風景が、そのポスターデザインに用いられることは、多くの関西学院人にとっては自然なこととして受け止められたのであろう。

【注】

- (1) 関西学院、『関西学院創立一二五周年記念事業報告書』、二〇一六年、七五頁。
- (2) Bates, C.J.L., 'These Sixty Years in the Ministry', 関西学院七十年史編集委員会編、『関西学院七十

- 年史』、一九五九年、五六七〜八頁。一柳米来留、『失敗者の自叙伝』、近江兄弟社、一九七〇年、六六頁以下。奥村直彦、『ヴォーリズ評伝』、港の人社、二〇〇五年、四一頁以下。
- (3) 山形政昭、『関西学院キャンパスの建築』(上)、『関西学院史紀要』、創刊号、一九九一年、一〇〜五四頁。
 (下)、前掲雑誌、第二号、一九九二年、九〜六二頁。
- (4) 山形、前掲論文(上)、三四頁の表より、編集は筆者。なお、関西学院は創立一二五周年を記念して神戸原田校地の復元模型を作製し、関西学院大学博物館に常設展示をしている。
- (5) 「洋人小学校」と表記されるのは、現在神戸市六甲アイランドにある Canadian Academy の創立時校舎である。同校の歴史概要によると「一九一三年九月一三日、カネイディアン・メソジスト・アカデミー(CMA)は、旧関西学院校地に近接する、現在は王子動物園となっている青谷町校舎に一六名の生徒を迎えて開校された。その校名から知られるように、CMAは一年生から高校生までの宣教師の子弟のための学校であったが、創立時より生徒たちのための寮も整えられていた。より広い入学生を迎えるために、一九一七年校名を Canadian Academy と改めた。∴(以下略)」。同校ホームページ <http://www.canacad.jp/page.cfm?p=4320> より。翻訳は筆者。その最初の校名、また開設年度からも理解されるように、「同校はまずはカナダ・メソジスト教会宣教師子弟の教育機関であり、その設立者には関西学院に着任した同教会宣教師が含まれている。脚注(4)の原田校地模型もその建物を含めて作成されている。
- (6) 山形、前掲論文(下)、四四頁の表より、編集は筆者。西宮上ヶ原キャンパスの歴史の変遷や現在の呼称については、関西学院創立一二五周年記念事業委員会編、『KWANSEI GAKUIN NISHINOMIYA UEGAHARA CAMPUS NAVI』、二〇一四年、所載の「西宮上ヶ原キャンパス散策おすすめルート」マップによった。関西学院大学博物館の常設展示資料として、一九二九年当時の上ヶ原中央芝生を中心とするキャンパス模型が展示されている。
- (7) 田淵結、『ヴォーリズと関西学院』、『ヴォーリズ建築の一〇〇年』(山形政昭監修)、創元社、

- 二〇〇八年、一四一～一四三頁。
- (8) 文部科学省ホームページ、http://www.next.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317974.htmより転載。
- (9) 'CONSTITUTION OF THE KWANSEI GAKUIN' Art.III における "accordance with the principles of Christianity" を学院においては「キリスト教(の)主義により」と訳出している。「学院憲法」、学校法人関西学院、『関西学院百年史』資料編Ⅰ、一九九四年、六二〇頁。
- (10) 田中敏弘、「天皇制国家主義教育と関西学院」、『関西学院史紀要』、創刊号、一九九二年、五六～一〇一頁。
- (11) 学校法人関西学院、『関西学院百年史』通史編Ⅰ、一九九七年、一九八頁以下。
- (12) 前掲書、二〇四頁以下、三二〇頁以下。
- (13) 前掲書、三二六頁以下。
- (14) 前掲書、四三六頁以下。
- (15) 一柳、前掲書、九二頁以下。奥村、前掲書、五五頁以下。ヴォーリズの年代記については種々公刊されているが、本論においては基本的に奥村直彦、『ヴォーリズ評伝』に従う。
- (16) ヴォーリズのキリスト教的な立場については、田淵結、「八幡のアメリカ人」②、湖声社、『湖畔の声』、二〇一五年五月号、一〇頁以下。
- (17) 森本あんり、『反知性主義』、新潮選書、二〇一六年、九三頁。
- (18) 前掲書、一五三頁。
- (19) 「中国に伝道している婦人宣教師 (Mrs. F. Howard Taylor) の講演があった…(中略)…そしてその講師は、まるで私だけを対象に語りつづけるようである瞬間、その講師の顔はキリストの顔に変わり、キリストご自身が、壇上からその愛のまなざしをもって、私の心を刺しとおし、私に、『お前は どうするつもりなのか』と尋ねていらっしやるように感ぜられた。」一柳、前掲書、七〇頁。

- (20) 奥村、前掲書、六〇頁以下。
- (21) ヴォーリスの滋賀県立商業学校辞任をめぐる議論については、田淵、「八幡のアメリカ人」③、『湖畔の声』、湖声社、二〇一五年六月号、一〇～一二頁。
- (22) 田淵、「八幡のアメリカ人」④、『湖畔の声』、湖声社、二〇一五年七月号、一〇～一二頁。京都Y M C A史編さん委員会、『京都Y M C A史』、二〇〇五年、六一頁以下。
- (23) 「コロラド大学に私は入学したときには、私の生涯の方針は、ほぼ確定していた。建築家になろうと決心し……」、一柳、前掲書、六二頁。
- (24) 京都Y M C A史編さん委員会、前掲書、一〇〇頁以下。
- (25) 奥村、前掲書、八九頁以下。
- (26) 山形、「関西学院キャンパスの建築」(上)、三四頁。
- (27) 「近江での最初の春」神戸では、学生青年会の地方部会が、メソジスト派の関西学院で催されていた。それから半世紀ののち、その学校が、新しい敷地に全校舎を新築するに当たり、私とその全体の設計を引き受けることになろうとは、そのときには夢にも思わなかった」、一柳、前掲書、一四〇頁。
- (28) 山形、『ヴォーリスの建築』、二一八頁以下。
- (29) 前掲書、二二二頁以下。
- (30) 関西学院キリスト教主義教育研究室、『関西学院青年會記録』(関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ)、一九七六年。同(関西学院キリスト教教育史資料Ⅱ)、一九八〇年。
- (31) 『関西学院青年會記録』において宮田守衛の名は明治三三年六月三日の「撰擧セラレタル役員」の中の「圖書係」として見られるのが初出である。資料Ⅱ、六頁。神戸Y M C A一〇〇年史編纂室、『神戸とY M C A百年』。神戸キリスト教青年會、一九八七年、一八九頁。
- (32) 田淵、「八幡のアメリカ人」⑥、『湖畔の声』、湖声社、二〇一五年九月号、一〇～一二頁。
- (33) 山形、「関西学院キャンパスの建築」(上)、三二頁。

- (34) 山形、前掲論文(下)、二二頁以下。山形政昭、『ヴォーリズの住宅』、住まいの図書館出版局、一九八八年、一〇二頁以下。
- (35) 田淵結監修、『ヴォーリズの「祈りのかたち」展』、関西学院大学、二〇〇四年、二五頁。
- (36) 大島襄二、『緑のキャンパス』、『関西学院通信 クレセント』、第一一巻二号、一九八七年、九〇頁。
- (37) ベーツの関西学院におけるキリスト教主義教育理解については、田淵結、『創立者ランバスとスクー
ルモットー提唱者ベーツ』、『関西学院の礎を築いた人・出来事から学ぶ』(連続講演会記録)、関西
学院宗教学活動委員会編、二〇一五年、一〇二頁。
- (38) 田淵、『祈りのかたち』、二五頁。
- (39) 今田寛、『校歌を通して知る関西学院・その建学の精神』、『目に見えないもの 言葉にならないもの』、
二瓶社、二〇〇三年、五九頁。